第２回第３次福岡市教育振興基本計画策定検討委員会 会議録

１　日時

令和６年７月 17 日（水）　10 時 00 分

２　場所

福岡市役所本庁舎　教育委員会 会議室

３　出席者

【策定検討委員会】

生田委員、石松委員、板谷委員、猪野委員、茅嶌委員、河野委員、
呉羽委員、徳永委員、西山委員、波多江委員、福岡委員、藤村委員

【事務局】

中尾総務部長、平川教育政策課長、石橋学校企画課長、井上小学校教育課長
ほか

４　開会

・事務局あいさつ

５ 委員紹介

・今回から出席の委員を紹介、委員あいさつ

６ 議題

（１）議題１　次期計画の全体像について

・事務局から資料に基づき説明

・以下、委員発言要旨

（委員）

身に付けてほしい力は、人間像を資質能力の形に構造化したものという理解でよいか。

（事務局）

目指す人間像は、子ども像ではなく、こういった大人になってほしいというもの。身に付けてほしい力は、そこに向けて、我々が関わるメインである義務教育の９年間が終わった時点で身に付けておいてほしいもの。

（委員）

目指す人間像での「自分の可能性を信じ、様々な変化や困難に主体的に向き合い」の文章は、身に付けてほしい力で言うところの、自ら学ぶ力に関わることが書かれているのだと思う。

そして、目指す人間像の中で、「他者と力を合わせ」と書かれているところが協働性を指しており、身に付けてほしい力で言うところの、「他者と協働する力」だと思う。

そうなると目指す人間像のうち、「豊かな人生やよりよい社会を切り拓く人」というのが、身に付けてほしい力では「未来へつなげる力」を指しているのかと思うが、実はその未来へつなげる力の内容に書いてあることは、目指す人間像の中の、「自分の可能性を信じ」の部分につながる、主体性に関わる話を書かれている。
　そして、身に付けてほしい力の「自ら学ぶ力」の内容は問題解決能力の話になっている。
　このように、資料２の図の中で、枠内に書かれていることが上の部分と下の部分で一貫性がない書き方がされているように思われる。

　また、「未来へつなげる」という言葉は、何か既存のものが上にあって、そこに自分をつなげていくとか、そこに持っていこうとする印象があり、受動性を感じる。
　社会を切り拓いていくというのは、つくっていく、開拓していくということだから、「未来へつなげる力」ではなくて、未来をつくる、未来社会をつくっていく力なのではないかと思う。「未来へつなげる力」の説明には、最初の能動性と真逆の内容が書かれていて、主張として弱いのではないか、授業を作るときに、主体的な子どもの姿として描ききれなくなるのではないかという気がする。もう少し改善の余地があるのではないか。

（委員）
　身に付けてほしい力というところを、義務教育段階で身に付けてほしい力と明示することで、大人になったときの姿でなく、子どものときの姿を表していると理解した。
　大人は「未来をつくる力」でなくては困るが、義務教育段階では「未来へつなげる力」で良いのではないか。
　たしかにご指摘いただいたような混乱は若干感じられるため、「未来へつなげる力」の説明文の２つ目冒頭に「社会の」を足して、「社会の困難や変化を自分事として前向きに受け止めている」にすれば良いのではないか。
　自分のことだけでなく、世の中のことにもちゃんと自分ごととして前向きに、社会の形成者、つくり手だという、そこを主体的に受けとめるという主旨で「社会の」を付け加えてほしい。
　それから、「未来へつなげる力」説明文の３つ目、「失敗を恐れずに新しいことに挑戦している」、確かに、これは学習でない場面での主体性だと思う。
　しかし、このことがなければ自分の未来にも社会の未来にも繋がらないのかなと思うので、義務教育段階では、ここに置いておいて良いのではないかと思った。
　また、未来へつなげる力という言葉をもっとシャープにするのであれば、「未来をつくる力」としておいて、義務教育段階でその基礎を培うという解釈でもよいかと思った。

（委員）
　先ほど義務教育中に身に付けてほしい力と言っていたが、「義務教育の」という言葉を、つけてもつけなくても変わらないのかなというふうに思う。例えば幼児教育の姿も、幼児教育が終わったときに育ってほしい姿と言いながらも、その姿というのは実は社会人としても必要な力が示されている。

それを考えたときに、１つは、幼児教育でもそうした動きがある中で、義務教育はここまでというふうに線を引くというあり方は、現代的なのかということが懸念される。
もう１つは、学校での子どもたちの学びであったり、そこで生活しているということが、これまでの、従来的な考え方としては「未来への準備」であるというふうに捉えられてきた。しかし、現在、子どもの主体性や主権というものを考えたときに、子どもたちは今を生きていて、学校で学んでいることというのがそのまま地域の活性化につながる事例が先導的な実践として広がっている。また、そうした先導的実践でなくても、今後、彼らは今生きる、暮らしそのものに生きる学びをしている。社会に出ていくための準備として義務教育を捉えるという発想をやめるべきではないか。
学校で学んでいること自体が彼らの暮らしであり、生きるということであり、そのものがその地域や暮らしを作っているというふうに捉えていかないと、いつまでも学校は社会へ出るための準備としてみなすということは、「将来役に立つかもね」というふうに、学校で指導するということのメッセージになっている。「学校の中で確かめなくていい、社会に出た後に使えればいい」という発想で、結果的にそのメッセージで授業づくりも進めていくことになる。このことが大きな問題である。身に付けてほしい力は義務教育の９年間での力ではあるが、「準備のための学校教育」のような話に終始するのではなく、今、それが、彼らが生きる上で必要であり、求められていることであり、まず身に付けていくことが期待される力であるということを明示する必要がある。先生たちの授業づくりが「準備」の前提になってしまうと、やはり教室の中にとどまった限定的な学習になってしまい、今求められている学びのあり方に向かわない。メッセージ性という観点でも変える必要があると思う。

（副委員長）
今回のこの計画は高等学校の教育も含めているものなのか、その辺りの守備範囲について、どう想定しながら考えれば良いのか。

（事務局）
福岡市の教育振興基本計画であるため、福岡市にできること、福岡市がすべきことになる。
福岡市には市立高校もあるため、そこも守備範囲にはなってくる。市立高校で提供する教育が守備範囲。

（副委員長）
社会教育みたいなものも含めるのか、それはちょっと置いとくのか。

（事務局）
今福岡市では、社会教育や生涯学習は、市長部局が所管して、住み分けをしているので、ここでは直接の社会教育は対象としていない。

（副委員長）
そうすると義務教育と高校までの教育というようなイメージで考えてよろしい

か。

（事務局）
福岡市は今市立幼稚園というのはないので、小中高で良い。
あと、家庭教育の支援というのは、そこに入ってくると思う。

（委員）
前回の会議のときに少し福岡スタンダードに触れるご意見があったと思う。
先日小学校を訪問させていただいたが、このスタンダードを大切にされているところがあり、学校のいろいろなことを決めていったり、授業づくりでも重要な要素になっていた。
今回この３つの力を決めることで、授業づくりとか、学校の取組みが決まってくるのだろうと思った。
福岡スタンダードをどこまで考慮するか。今回提案があった身に付けてほしい力は、福岡スタンダードの学びの柱の自学・共学、未来への柱のチャレンジ、この３つが取り出されている感じにも見える。そして生活習慣の柱を外しているようにも見える。
しかし、あいさつ・掃除は、授業づくりとは言えないが、ウェルビーイングを考えると、あいさつイコール非認知能力というわけではないが、社会でいろいろな人と関わっていくときの第一歩を大切にしているというのは、非常に重要な価値観であるということを視察の中で学んで帰ってきたところ。
福岡スタンダードをどうするかということをここで決めることではないのかもしれないが、これまでのよさや強み、今の小学校が取り組んでいる、培ってきたものを活かすという意味では、新しいスタンダードを作るわけではないが、議論の中で、少し自学・共学・チャレンジであったり、その生活習慣の柱学びの柱未来の柱というのを、何か議論の中に含めておくと、実際計画として外に出したときに、先生方が発展的に捉えていくことができるのかなと思う。
ただ、今回示される力というのがやはり授業づくりとか、学校づくりにすごく影響を及ぼすところになってくるのかなと思う。福岡スタンダードが一定の成果を上げているのと一緒で、今回示される力というのはかなり今後の教育界に影響が大きいところであり重要な議論だろうと考えている。
また、「身に付けてほしい力」について、「未来へつなげる」というよりは、シンプルに「チャレンジする力」の方が、具体的に子どもの姿を示しているから良いと思う。先日の第１回会議でも「失敗するし、失敗してもいい。失敗して、そこでとどまってしまうかもしれないけど、やはりそこの失敗する環境を作るということも大事になってくる」という話があったので、そのあたりをうまく取り入れていくと良いと思う。自分を未来へつなげると言うよりは、現段階で挑戦できる、失敗をせずに新しいことに挑戦するということが、子どもたちにさせたいことであり、身に付けさせたい力。そういう授業づくりだと本当に面白い授業づくりができるのではないか。

（事務局）
福岡スタンダードについては、各学校でも定着してきていて、この考え方をまるっきり否定して次へ移っていこうということではない。今の計画の中で福岡スタン

ダードの考え方が示されており、例えば生活習慣の柱、あいさつ・掃除のところで目指すものは、人間関係形成力と、責任義務を果たす心の醸成が目的です、というふうにされている。それは、新しく定めようとしている計画骨子案中、身に付けてほしい力の中の、「他者と協働する力」に考え方が継承されている。

自学というところは、「自ら学ぶ力」というところに継承されているし、チャレンジ・立志というところが、今回で言うと「未来へつなげる力」に継承されている。福岡スタンダードの考え方は踏襲しつつ、表現をアップデートして、示していきたいという考えで作っている。

（委員）

今、福岡スタンダードの話が出たが、未来への柱というところでチャレンジ・立志となっており、チャレンジは様々なことに興味を持ち取り組もうとする態度、立志は夢や目標を持ちその実現に向かって進もうとする態度となっている。今現在、小学校でも、この未来への柱も大事にしながら、授業をしている。

その中で、自分たちが勉強して何かに取り組んで活動したりすることで、地域がちょっと変わったとか、自分たちの生活に変化が訪れたとかいうふうに、子どもたちは、小学生なりに、「今できたな」「自分たちが役に立ったな」と思う瞬間がある。

未来へつなげる力に書かれていることで今自分たちができることというのは、小さなことかもしれないが、「自分たちが作っていけた」というような思いを持つことは可能だと小学校段階でも思っているので、そういう言葉が入っていても良いと感じた。

（委員）

まず今回身に付けてほしい力は、義務教育を前提にということだった。周知のとおり、学校教育法で規定されている目的の条文では、小中高はつながっているので、基本的にはこういう中学生が育って高校に入ってくるかなという認識で捉えていくことになるという理解。

それから、「未来へつなげる力」について、前回の委員会の中でも、今、子どもたちがその場で変えていく、準備ではないという話があった。

私は前任校の総合的な探求の時間の中で、ＳＤＧｓをテーマにして、社会課題を解決していこうというテーマで活動を行ったが、その中で、我々に想像しえないような発想が出てくることがあった。

例えば、ごみが散らかっているという課題の解決法として、生徒たちが考えたのが、ごみ箱にモニターをつけて、きちんとごみを入れると、モニターに好きな推しのアイドルの映像が出てくるとか、そういうインセンティブがあれば解決するのではないかという発想。そういうところを見ていると、子どもたちが私たちを超えていく時間というのがあると思う。

未来を創造する力というのが、今、子どもたちが解決できる可能性を秘めているのかもしれない。

（委員）

私がサポーター会議や授業参観に行って感じるのは、私たちが子どもの頃、学校での授業というのは、一方通行的な授業だったと思うが、今は、先生と生徒がお互

いに話して、生徒が理解しているかを先生もわかるような時代になっているのではないだろうか。
　働き方改革に関連して、特に中学校の方から聞いたのは、部活動について、以前は先生方に「ブラスバンドの部長をしてください」とか、「野球部の部長してください」と言って担当してもらっていたが、今は働き方改革で、それもあまり無理には言えない、そういうふうな時代になっている。
　それは地域に、そういう人材を求めるという時代になっているが、地域として受け皿がなかなかいない。今小学校６年生のアンケートをとったら、５割以上の子どもたちは中学校で部活動に入りたいという意見が出ている。だから、部活動の充実を進めていただきたい。
　もう１つは、学校の授業日数について気になっているが、これは文部科学省で決めているのか。

（事務局）
　標準授業時数は文部科学省で定められている。

（委員）
　それが減少傾向になるということはないのか。

（事務局）
　今のところそのような話は聞いていないが、いろいろ工夫をして、より良い学びのあり方を作っていかなければならないと感じる。

（委員）
　先生方は、決められた授業日数を確保するのに大変だそう。例えば災害や、コロナなどで授業日数が結構制約されるのではないかなと思う。
　学校の授業日数を、校長先生の判断によって若干の増減はできないものか。子どもたちが土曜日に登校しているときがあると思うが、１年間に何日ぐらいあるのか。

（事務局）
　現在は２日である。

（委員）
　若干その授業数を減らすというのは、学校の判断でできないのか。

（委員）
　標準授業時数は国が定めていて変えられない。しかし、一日や一週間の授業時間割と年間の総授業時数を混同してはいけない。
　最近調査であったと思うが、学校が標準時間時数よりもかなり多くの授業時間数を確保し、年間の計画を立てているという実態調査結果が全国的に出されている。
　基本的にその学校の年間計画というのは、学校運営に即して行うので学校長が負うことになっていて、でも先ほどおっしゃられた災害などで突発的な休校があるなど、いろいろな形でぎりぎりの時数で計画してしまうと何かあったときに標準時数

を確保できないという側面もあるので、こうしたことが起きていると思われる。

（委員）
私は授業数をできる限り少なめにして、中身をしっかりやりたいと思うが、今までずっといろいろな学校行事とか授業でやってきたことが積み重なってやめきれないところもある。
教育委員会や国からは「ちゃんと削減して、学校長の判断で、ある程度しなさい」と言われているので、そうしている方もいらっしゃる。しかし、地域の行事がたくさんある所や、校区がたくさんある学校は大変。
一概には言えないが、国も教育委員会も、きちんとそういう指示を出しているので、いろいろ変わってきているところが多くなっている。

（委員）
保護者からのクレームが多いと聞いた。その対応を先生がすると大変だから、退職校長先生を各学校に配置して、第一次の対応をするようにすれば、先生方の負担も若干減るのではないかと思う。

（事務局）
そういった教員の負担軽減はしていく必要があると思う。具体的な取組みについては今後各論の部分でまた検討させていただきたい。
今回の総論では、先生が生き生きと子どもたちと接していくということが大事だと考えており、先生が心身ともに健康で充実した状態であることが必要だということを基本方針のところで、出させていただいている。

（委員）
身に付けてほしい力について、中学生を見ている中での自分の意見になるが、委員が「教室の中で収まってしまうっていうところから脱却していかないといけない」と言ったところについて、先ほど部活の問題とか、働き方の問題とか出していただいていて、本当にいろいろ先生たちは苦労されているのだが、もう１つ考えられるのは、資料２では、３つの身に付けてほしい力（「自ら学ぶ力」「他者と協働する力」「未来へつなげる力」）とありながら、資料３に記載の施策ではまだ学力心体の育成になっている。ゲームチェンジャーじゃないけども、「福岡市は違うぞ、これからのことをよく見ているんだな」というふうになってほしい。我々が管理職として、先生たちに、「これからこんなふうになりますから、こんな授業にしましょう」とか、「こんな働き方をしましょう」とか、地域に、この言葉を使って伝えられるようなものになってほしい。
だから、当然今まであいさつ・掃除とか、福岡スタンダードが効力はあったかもしれないが、結果的にそこだというところと、これから身に付ける力の中で、先ほどの挨拶についても、学校によって変わってくるかどうかは別として、どういうコミュニケーション能力にするのか。
それから、前回委員に学校を訪問してもらい、職員にも研修していただいたが、「今までやっていたことで、こんなことを変えないといけない」とか、「今まで私たちがやっていたことは、正しいこともあったんだ」など、良い勉強になった。
福岡市として、先々を見越した良いものができたらなと思う。

（委員）
　計画推進にあたっての共通の視点のところにウェルビーイングがしっかり入っているという点が、とても良いと思った。
　ただ、ウェルビーイングというのは結構危険な言葉でもあって、多義的なもの。先生方がすとんと落ちない言葉でもあるので、丁寧に説明する必要があると思う。
　一人ひとりのウェルビーイング、要するに個人が幸せであることと、より良い人間であり続けようとすることの２つの実現と、その総和としての社会全体のウェルビーイングという、「わがままだけじゃ駄目」という日本独特のそういう価値観みたいなのもありながらという点をきちんと押さえる必要がある。
　また、ＤＸについて、これは授業の改革にも資するし、チーム学校として、学校をより良くしていくため、働き方改革ぐらい効果のあるものにするために価値観の変革も含めたＤＸがとても大事なので、説明でそういうふうに言っていただいたのはとても良いと思う。
　単なる電子化、デジタイゼーションの次の教育データの利活用という、デジタライゼーションで止めることでは駄目だと思う。子ども一人ひとりが学ぶために１人１台タブレットがあって、協働的に学びやすくなる。また、先ほど委員がおっしゃった、「子どもだからといって準備じゃない」、「もうすでに地域を変えている」という話がとても大事だと思っていて、子どもたちが本物の探求をしている。そして社会のことを考えているということも含めて可能にするためにも、そういうデジタライゼーションが効くみたいなことがあるので、この２点を挙げていただいたのはとても良いことだと思った。

（委員）
　ウェルビーイングとＤＸについて、計画推進にあたっての共通の視点として、ウェルビーイングは目指すべき方向性だと思う。ＤＸは人のいわゆるテクノロジーとの関わり方とか、向き合い方という側面もあると思うが、一方で、向き合ったところで、そのテクノロジーがそれに見合ってないと関われないという状況があることを考えると、ＤＸというのは環境の話だと思う。
　ＤＸを掲げることが、どういった動きを生み出そうとしているのか、施策の方向性を教えてもらいたい。

（事務局）
　ウェルビーイングとＤＸは、少し性格が違うものだというのは理解している。これからいろいろな施策体系を作る中で、どの施策を推進するにあたっても意識してほしいこと、立ち戻ってほしいこと、「この施策は子どものウェルビーイングにとってどうかな」、「教員のウェルビーイングにとってどうかな」と思ってほしいこととして、ウェルビーイングを置いている。ＤＸも、ＤＸの推進という施策を置くというより、例えば、子どもを主体とした学びを進めていくために、何かデジタルが使えないかという視点で考える。
　教員の負担軽減の部分でも、施策を行うにあたって、何かデジタルに変えられないかなど、常に意識すべきこととして考えている。

（委員）

ウェルビーイングは、極端な言い方をすると姿勢の話と言えるが、ＤＸはお金の問題がすごく大きい。
したがって環境、基盤としてＤＸをどういうふうに捉えていくのかというのは、結構違う話になるのではないか。
ＤＸの捉え方自体では、そこへどれだけお金がかかるのかとか、どこまでどれぐらいのスパンでこの計画の期間の中で捉えようとしているのかということの具体性があるのか気になる。

（委員）
ＤＸは単純に環境の問題と捉えないほうが良いと思う。
それがデジタライゼーションまでと違うところ。例えばＤＸはトランスフォーメーションなので、価値感の変革を含んでいるという点がこれまでの電子化と違うところ。今まで教師主導の一斉型授業という捉え方から、「1 人 1 台タブレットを整備したから、個別最適アプローチする」という教育の根本的価値観の変革まで含めて、初めてＤＸというと考えている。
例えば、いじめについて手入力のアンケート調査を月に１回やると、見逃しがいっぱい発生するし、みんなが見ているところで入力させると、いじめっ子と一緒にいる中で書くわけだから、難しい。
それを、例えば、タブレットを使って、自宅で入力するから学校で入力しなくて良いというようにしてあげたり、いろいろな配慮をする中で、いじめの早期発見とか、早めに相談乗らなきゃいけないというのが発見できる。そういった、今までは静的な把握だったのを動的に把握して、早めに関わってあげることを可能にするという教育的な効果が先にありきで、それをデジタルの力で初めてできるようになるみたいなものがＤＸであると考える。単なる電子化ではない。
しかし、計画に、環境整備のために市が責任を持つべき、教育の基本的な基盤であるというようなことを書いておくのは良いのかなと思った。ウェルビーイングとＤＸは、たしかに、向いている方向は異なっているが、書く意味があると思う。

（委員）
今の国の流れはＤＸを走らせて、意識改革をしていこうという動き。ＤＸを持ち込むから、それに合わせて意識を変えろということ。
そういうふうに引っ張っていってＧＩＧＡスクールを作っているが、ＩＣＴを入れても行動主義的な授業をするし、むしろＩＣＴを入れることによって行動主義が顕在化するし、ＩＣＴを入れても一斉型の授業してしまう。

（委員）
教育委員会が指導するとそうなってしまう。

（委員）
それは指導とは関係なく、教師の学習観とか教育観というものが、道具によって顕在化してくるということ。
それをＤＸといって、やり方とか物事の発想を変えていくというふうにして授業を引っ張ろうとするというのは、ＧＩＧＡスクール構想の１つの大きな動きだったと思う。身に付けてほしい力は上の３つであって、それを支える環境整備の話だと

か、基盤経営的なものとしてＤＸがある。だから、この位置にあるのは良いのかなと思う。
　ただ、ウェルビーイングは方向性の話なので、この２つが並ぶことに少し違和感はある。

（委員）
それは同じ思い。
ウェルビーイングが、一番上に書いてあれば問題なかった。

（副委員長）
　基本方針について、多様な教育ニーズへの対応のところで、障がいだけでなく幅広い困った状況にある子どもたちのことを想定しているのだと思うが、どんな用語を使うのか、教育ニーズと言ったり、教育的ニーズと言ったり、またはニーズだけを使うのか用語の使い方を整理しながらやっていく必要がある。
　また、安心安全な教育環境の整備のところで、物理的な安心安全だけじゃなくて、子どもの心理的な、安心安全の部分がこの中に盛り込まれているのか疑問に思った。

（委員長）
　文部科学省から出ているものでも、心身の安心安全とかそういった表現としてあったりする。

（委員）
　身に付けてほしい力について、特別支援学校の子どもたちの育成の視点から考えてこの３つを見ると、特別支援学校高等部を卒業したら就労という目的で働く力をつける、働き続ける力を育成するという視点で、小中高と子どもたちを育てていく中で、子どもたちにどんな力を付けたいかというところで話すと、子どもたちの主体性であったり、自己選択・自己決定ができる力であったり、学習面、生活面での振り返りができる力、そういったところを考えると、自ら学ぶ力というのが、当たるかなと思った。
　また、人とのコミュニケーション面や協調・協働できる力というところが他者と協働する力になるかなというふうに思う。
　また、働くために必要な力として、あいさつ・掃除というのをすごく大事にしているところであるが、それが先ほどの地域社会の一員としての自覚というところに繋がるというところで腑に落ちた。
　３つ目の「未来へつなげる力」について、子どもたちが夢を実現する力を身につけるとか目標を達成する力を身につけるとか、豊かな人生という視点で、子どもたちにいろいろなことにチャレンジしていこうというふうに育てている。
　表現的に未来へつなげる力が良いのかという議論はあるが、この３つの身に付けてほしい力というのは、特別支援学校の視点でも、非常に良い言葉だと思う。

（委員長）
　今、例えば不登校の子どもの支援などに対する先生方のアプローチというのも多様で、かなり寄り添って丁寧に関わろうとして、いろいろ動かれている先生方には

頭が下がる思い。ただ、そうしたことと、働き方改革の兼ね合いが非常に難しいという現状があると思う。
　例えば、何かの行事をきっかけに、不登校の子どもが参加してくれたらと思ってサポートしている立場もあれば、行事を全体的に進めていきたい立場からすると、やはりある程度早く人数が確定した方がありがたいということになり、その子が来るのか来ないのかということが毎回課題になる。そのあたりで寄り添っていかなければという動きをしている先生方に少し居心地の悪い状況が起きたりしているようなので、丁寧に寄り添うということに対してそれなりに価値づけをした表現が含まれていると良い。

（委員）
　「未来へつなげる力」の議論がされていると思うが、小学生でも、小さい子どもが１人の社会の担い手だという意味では、未来へつなげるというよりも、未来を積み上げるような、その時その時を１つ１つ積み上げていくというような感じでも良いのではないか。
　あと、家庭・地域連携、家庭教育の推進について、ＰＴＡとしても、保護者としても、力が発揮できたら良いと思う。
　働き方改革について、先生たちが頑張っているのを、すごく目の当たりにしているので、小さいことだが直接先生に行く話を、ＰＴＡや保護者にワンクッション置くことで、先生たちが少しでも楽になるのではという思いで支えていけたらなと思う。
　また不登校に関して、先生方が何とかしようというよりも、地域とかでもう少し連携がとれるような形がとれたら良いと思う。

（委員）
　今不登校がどんどん増えていて、特別支援が必要な子どももどんどん増えて、そういったニーズへの対応を頑張りましょうとなっているが、基本方針の真ん中に記載されている「子どもを主体とした学びの推進」で、何か授業・学校がもう１つ変われば、特別支援も不登校も減るような働きかけが学校の中でできるのではないかと思う。
　今回の施策で先生たちに授業・学校を「変える必要がある」というメッセージ性がもう少し必要かと思う。

（委員）
　うちの学校では、活動にしても授業にしても子どもたちが主体となる場面が多い。
　地域のいろいろな取組みがあって、伴走者の先生たちが本当に寄り添っていったら、子どもが来やすい学校・教室になるのではないか。

（委員）
　用語として、他者という言葉に非常に違和感があるが、こういう言葉は教育現場で使われるのか。
　「他者と協働する力」の説明の２つ目に「異なる他者を知り」と書かれているが、人々と繋がっている中で、商売など経済活動をやっているから、自分と他人を

別に置いているような感じが理解できない。
　また、未来へつなげる力というところは、チャレンジが良いのではないかと思う。Fukuoka Growth Next など、自ら開業して仕事をつくる、創業も支援していることから、未来というよりは、自分自身がどんどんチャレンジしていくというふうな力を、身に付けてほしい力というふうにしたほうが良いのではないか。

（事務局）
　他者という言葉など、一般的な方から見た言葉をもう少し意識しながら、文言を考えていけたら良いと考えている。

（委員長）
　「他人」でなく「仲間」と言ったら、「いや、友達じゃない人もいるし」と言われるので、ではその人達をどういった言葉で表すか。例えば同じ班になったら仲良しの友達ではなくても、同じ学び合いができるように、ということを考えたときには、一番当たり障りないので、学校では他者と使っているところはあると思う。

（委員）
　日本の学校教育言語。現場ではアザーズは使わない。ピアとかコミュニティとか、メンバーとかそういった形で使う。確かに独自の言葉かもしれないと思うが、逆に外すとそれはそれでややこしくはなると思う。

（副委員長）
　多分セルフとアザーの違いで発達的にはそれをどう区別していくかという時に、アザーを他者にしてしまう。

（委員）
　発達用語からきているのかもしれない。学習系としてはちょっと使わない気がする。

（副委員長）
　身に付けてほしい力で、自ら学ぶ力のうち、自学の方が先にあるとは思うが、学んでいく上でもどう人と繋がるかというのは、従来、繋がるなかでまた学びが成り立っていくという流れだから、協働する力というよりは人と関わりながら学んでいくものみたいなところをより重視するような形も良いかなと思う。人は繋がりの中で生きている。絶対にその繋がりの中で、いろいろなことをサポートしてもらいながら学んでいくわけだから、その繋がりをどう大事にするか。
　特に障がいの重い子どもさんたちも、先生と繋がりながらどう経験していくかみたいなことが大事になるので、そちらを前に出すというのも、時代の流れからするとあり得るのかなと思った。

（２）議題２　次期計画の施策体系について
　・事務局から資料に基づき説明
　・以下、委員発言要旨

（委員長）
施策の数が多かったので減らすということ自体は、全然問題ないと思う。ただ、例えば、確かな学力の育成の話と、教職員の資質・能力の向上の話は、取組みとして、かなり重複していくところがあると思う。
施策の本数というものが、ある意味プロジェクトの本数になるということなのか。「１　確かな学力育成」に関わる事業はこれ、「２　教職員の確保及び資質・能力の向上」に関わる事業はこれ、のように一対一対応として描いている施策なのか、それとも、その施策を実現するために、１つのプロジェクトで賄うみたいなことを考えられるのも施策と言うのか。

（事務局）
この基本施策は、大きな枠組みのようなイメージ。この下に、具体的な事業がある。福岡市の教育振興基本計画では、具体的な事業までは書き込んではいない。今も、方向性を示しているところ。
たしかに施策ベースでいうと重複する取組みは出てくる。
我々が計画についての進捗状況を報告している、法に基づく点検・評価においては、片方の施策に書いて、重複する施策では再掲という形で掲載している。例えば部活動指導員を入れるという事業は、教員の負担軽減にも資するし、「チーム学校」による学校の組織力の強化にも役立っているということで、両方上がることはある。

（委員）
評価指標の大枠としてこの基本施策というのを置いていて、実際にどういった事業を動かすのかというところに関しては、教育委員会が動かしていくところなので、そこの重複などに関してはあまり考えなくても良いということか。

（事務局）
その事業で重複するというのは、実務上出てくるが、計画上、重なる部分があって良いかと思う。

（委員長）
一つ確認だが、次期計画の施策体系として外に出されるときには、「現計画の施策」の縦列は外される形で出るような想定か。

（事務局）
たとえば議会で説明するときは、わかりやすくするために入れる可能性はある。最終的な完成版では前計画との比較というのは入っていない想定である。

（委員長）
見え方としては基本施策と主な内容の部分とで、どうなのかというところで議論した方が良いか。

（事務局）
　ただ、具体的な内容はまだこれから当然変えていくものであり、今回は項目出しのような話なので、現計画の施策を書いているのは、きちんと今の計画の守備範囲は網羅しているということをお示ししている。
　まず前提である施策の立て方というところを本日の議題とさせていただいているところ。今後、各論を作りこんでいく。

（委員）
　議題１のときから気になっていることだが、例えば、基本方針の、多様な教育ニーズへの対応の内容に特別支援教育のことが記載されている一方で、安全安心な教育環境の整備のところは、設備だけじゃなくて心理的な安全性が含まれているのか、というお話がさきほどあった。
　心理的な安全性と設備等というのは、今後多様な教育ニーズへの対応という視点から、この「安全安心な教育環境の整備」に組み込まれてくるのではないかと思っている。基本方針が多いが、本来まとめられるものをわざわざ分けているというふうには見えなくもない。
　しかし、分けて書くことによって、それらがちゃんと前に押し出されて明確化されるので、方針としてしっかり柱が立つ、という考え方はあると思う。
　例えば基本方針「子どもを主体とした学びの推進」の中に「教員のあり方」が括弧書きである一方で、他基本方針の一つとして「教員の資質・意欲の向上」がある。こうなると、教員のあり方と教員の資質は何が違うのかということになってきて、これは重複している。この基本方針の５つ、ないし、ここにあるいくつかは、ベン図的に重なっていることになる。結果的に、おそらく同じ事業で重複する内容というように実際にはなるのだろうと思われるのだが、基本方針の内容には問題ないにしてもこれらの重複や関係がわかるようにするために階層化するなど、より整理された説明にすることができるのではないかという気がする。
　また、基本方針「子どもを主体とした学びの推進」から成る基本施策が３つあるのに対し、「多様な教育ニーズ」や「安全・安心な教育環境の整備」から成る基本施策は１つである。基本方針から成る施策が１つだったり２つや３つだったりするのが気になる。基本方針と施策の関係のアンバランスさがないように整理されて書かれていくものだと思う。
　こうしたことが起きる要因は、先に指摘したように５つに分けている基本方針が、本来３つぐらいで収まるにも関わらず、同じレイヤーで分けてしまっているからではないかと思う。こういうふうに示すのであれば、例えば、多様な教育へのニーズと安全・安心な教育環境の整備の基本方針が１つにまとまっていて、施策としては、多様な教育ニーズと安全安心に学ぶ環境の整備、というふうに、方針１つに対して施策が並ぶみたいな構造の方がわかりやすいのかなというふうに思う。また、特別支援教育についても設備環境はこれから求められているし、福岡市も実際に進めているのだと思うから、実態としても重複しているように見えるというふうには思う。

（委員長）
　多少またがることはやむを得ないと思うが、置き方などについてもまたご検討いただきたい。

（事務局）
　おっしゃるとおり、基本方針があって、そこにぶら下がる基本施策があるが、一対一というのは何かちょっとバランス悪いというのは確かに考えるところがある。大括り化しても５個になってしまったというところはある。
　さらにまとめることができないか、今後検討させていただければと思う。

（委員長）
　豊かな心の育成について、道徳教育や人権教育の推進というようなところもあるが、今、非認知能力を高めるとか、そうしたことの中で、ソーシャルアンドエモーショナルラーニングであるとか、子どもたちの予防教育の重要性というのは言われている。
　心理教育と書くべきか予防教育と書くべきか表現は検討していただいても良いかと思う。やはり、道徳教育には、カチッとしたカリキュラムがあるし、そうしたところだけに依存すると、それだけではカバーしきれないところもある。
　道徳教育をコマの中だけでやるから良いとしてしまうと、豊かな心が育ちきれないのではないかと思うところもあるので、そういったキーワードが主な内容の中に含まれていても良いのでは。

（副委員長）
　社会共同学習みたいな話があったが、身に付けてほしい力の３つのまとまりとこの施策とがどう絡むのかが、よくわからなかった。
１つは、他者と協働する力を高めていくためにどこでどんな取組みをすることになっていくのか。
　それが道徳教育というと、何かちょっと違うなという気がする。身に付けてほしい力と施策の繋がりが、しっかりしていないといけない。

（事務局）
　施策体系で言うと基本施策の１～３、学力、心、体という言い方をしている、子どもの育成に関する部分のところがあるが、この３つを通じて、総合的に、「自ら学ぶ力」、「他者と協働する力」、「未来へつなげる力」を身に付けてほしい、というのを基本的な考え方として持っている。

（副委員長）
　子どもの主体的な学びの推進というのが身に付けてほしい力の３つのまとまりを表すということか。

（事務局）
　確かな学力の育成の中でも、自ら学ぶ力や、他者と協働する力、３つそれぞれ触れる部分もあれば、心の育成の部分でそれぞれの身に付けてほしい力に寄与する部分もある。

（委員）
　身に付けてほしい力の捉え方が３つ別物になっているのではないか。

私は自ら学ぶ力と他者と協働する力は相乗効果のある関係だと捉えていて、別物に分けられない。自ら学ぶ力を育てるのであれば、他の人と関わって協働することが大切だし、他者と協働する・他者と関わるのであれば、自分の学びも自ら学んでいく力も身につけていく必要がある、という関係で捉える。教育とは必ず重要なものは分かちがたく、相互に関係があって、重なるものであり、この３つの関係を別々に考えるのではなく、相互に、相乗的に関わっていって、そのことによってこの目指す人間像になっていくというイメージ像がまず共通して描けないといけない。

施策体系については、昔から学校の校訓とかでもある、いわゆる「知・徳・体」の３つで表現する構造でなっていることが多い。

学習指導要領の解説を作ったりするときにも、総合的な学習の時間だと学校の目標と関わっているので、学校の目標がどういう構造になっているのか議論している。そうすると、「知・徳・体」の形になっていることを踏まえて、学校の目標と総合的な学習の時間の「第１目標」を合わせて、各学校での総合的な学習の時間の目標、計画を作りましょうということを指導計画の例で出す。総合的な学習の時間の目標の書き方・学校の文化である書き方である、知徳体を意識して書くということへの歩み寄りをしている。

先ほど委員がおっしゃったのは、今後も同様の目標構造で、それは知徳体のような形で示す、という前提か？ということで良いか。

（委員）

これで良いのかという話はあったが、知徳体にしてしまうというのは、極論あるかなと思う。コンピテンシーと入れるのも良いかと思ったが、１番はやっぱり文部科学省も言っているように知識技能だと思う。

２番が、思考力判断力など人間性の話になるので、今回の内容が国の施策とどうリンクしているのかは少し気になり始めたところ。

それから、基本方針の話と絡めると、やはり子どもを主体とした学びの推進がゴールに見える。その他の基本方針は、子どもを主体とした学びの推進が前面にあって、共通の視点として、施策４から８がある構造というイメージ。

そういうイメージを持った方が、先ほど委員が指摘されたところがクリアになって、目指しているのはこの３つ、つまり、知の育成・徳の育成・体の育成の３つです、それをやります、と。その背後にある大事なのは、教員の資質向上も大事だし、多様な教育ニーズも大事だし、すべてに関わるというところがあるので、先ほど議論を聞いていると、まずはそこの１～３。

ただ、委員がおっしゃったようにこの１～３が、今回出している力とどういう関係あるのかというのも気になるところではある。

基本方針のところが少し構造化されているのかなというのは、今議論を聞いていて思った。

（委員）

たしかに、基本方針なのに構造化してレイヤーをつくることで優先順位があるようになってしまうと、それは良いのか気になるところではある。

（委員）

今回いただいた資料で、次期計画の全体像について、先ほどウェルビーイングとＤＸの話が出たが、計画推進にあたっての共通の視点という考え方は良いと思った。何か考えるときに、ＤＸの視点で大丈夫か、ウェルビーイングの視点で大丈夫か、というので、考えやすくなる。例えば目指すゴールとしてウェルビーイングが置かれることも良いが、別にウェルビーイングを目指しているわけではないから、全体像の上に位置するものでもないと思う。

それと同じように、基本方針も構造化されていて、施策４～８はどの場面でも必要なので、共通している一方、施策１～３はどちらかというと割と包括的なゴール像をイメージしているように感じるので、基本方針の多様な教育ニーズへの対応以降と、子どもの主体の学びの推進というのは別なものに感じる。

（委員）

ここまでの話を聞いて、現在の図の書き方は、子どもを主体とした学びを推進するという基本方針がやはり中心にあって、それを加速させたり支えたりするために、他の４つがあるような構造を想定した図のように読み取った。この見方で良いのか。

（事務局）

今のところ基本方針の中の５つを階層化はしていないが、教育計画を検討しているのだから、やはり一番中心にあるのは、子どもを主体とした学びが中心なのではないかというふうには考えている。

それに加えて、それを受けられない子どもがいないようにということで多様な教育ニーズの対応というのももうひとつ大事なことだと思う。その２つを支える要素として、教員、教育環境、地域・家庭というのがあるというイメージではいるが、はっきり構造化はしていない。計画を策定するときもそこは並列で出すのかなというイメージでいるところだった。

ただ本日ご意見をいただいたので、階層化した方がわかりやすいのであれば、そういうところを検討すべきかと思う。

（委員）

全体的な方向性と、各施策について、お話したい。

１点目は、先ほどから議論が出ているように、世界と日本の教育改革の理念を踏まえるということを考えていて、大きな方向性は大丈夫か確認する必要があると考えた。資料を拝見するとちゃんと踏まえているので、妥当であるというふうに判断している。

２点目、いただいた資料では、福岡市ならではの強みを活かすという点がまだ少し弱いように感じる。先ほど福岡スタンダードの話があったが、そういう積み上げを次にどうつなげていくかという視点や、また、全国に助言に入る中で福岡市について感じたのは、校長会が非常に上手にリードされているということ。例えば校則を子どもたちとともに考えて作っていくみたいなのは全国的にも非常にまだまだ先進事例として認識されるものだと思うし、制服もジェンダーフリーにすることを率先して行い、全国のモデルになっている。

そういった新しい教育へのチャレンジやインクルーシブな教育など、そういったものはきちんと踏襲していただきたい。

また、福岡市のにおいが今回の計画からしないなと思って見ていた。福岡市の良さ、国際性や、他地域から見ると非常に恵まれた自然環境、海あり山あり川ありの文化的環境、そして地域の人材、そういったものが最大限生かせるものになっているのかという視点でちょっとチェックしたい。

３点目は福岡市の課題を解決するということで、２点目に話したことと全く真逆の発想にはなるが。私の教え子も教員をやっているから、状況を聞くことがある。また、福岡市の学校を見せていただいて、福岡市の先生はすごいと思った。やる気・意欲が高くて、いろいろな工夫をされている。ただやはり市内の状況を聞いてみるとやはり格差がまだ大きい。それは学校間格差でもあるし教員間格差でもあるというふうに認識している。

これは何が欠けているのかというと、この教育改革を実現するために、先ほどから委員で議論したような、目指す方向性としての理念をどうしたら具体的に実現できるのかという議論を、実は先生たちが共有していないということ。それがとてもよくわかった。

したがって、先ほどの教員の研修や人材育成のあたりに、その辺を明確に入れていかないと、絵にかいた餅で終わってしまうのではないかということを強く感じる。

あともう１つとても気になっているのが、実は、学力が高いところは、教師主導の課題解決学習で学び方をきちんと鍛えて、その上で子どもに委ねているというのがあって、福岡は割とここをしっかりされていると認識した。ただ、児童生徒主体の課題解決学習というところで止まっている。

変化が激しく予測困難な時代は、問題発見能力が最も重要と言われているにもかかわらず、問題発見からやるべきなのに課題を与えるというところから始めている。ここは大いに改善すべき点だと思うのでぜひ共有してやっていただきたい。

最後に、人材像について、日本政府の教育目標は一人一人のウェルビーイングとその総和としての社会全体でウェルビーイングということになった。

要するに、目指す人材像のところで、その中に私はやっぱりウェルビーイングの要素を入れたいと思った。

実際に福岡市の学校を見ていくと、まだまだ前を向いているクラスの配置のところもあれば、二重円になって子ども主体でガンガン追求しているところもあり、どうやって学ぶかは全部子どもが決めるという事例は非常にハイレベルだと思った。

だから教員研修が大事。グッドプラクティスを共有することが大事だと考える。

７　閉会